尻取リレーえっせい №5

「手探りのまちづくり技術・・・AR（る）」→

「類推」を楽しむ

前回の執筆者、藤田先生は私にとてつもない課題を押し付けた。「る」で始まるタイトルのエッセイを書けというものだ。しりとり遊びでも、「る」で始まる言葉を探すには大変だ。それで単語ではないもので考えてみた。「瑠璃も玻璃も磨けば光る」「類は友を呼ぶ」。いずれも私がテーマにしようと思っているものに似つかわしくはない。仕方なく国語辞典を見たら、「類推」という言葉にぶつかった。これなら書けそうだ。ということで、タイトルは「「類推」を楽しむ」。

テーマは「落語の奥深さ」。前置きでごじゃごじゃ言いながらなんや、と思われないように書ければよいが…。

昨年亡くなった桂春団治師。この人の落語は「聞く」というよりも「見る」というほうが相応しい芸だった。まず、話のマクラから本題に移るときの羽織の脱ぎ方、羽織の紐をほどき、両袖をもって、ツッと引っ張る。すると羽織が肩から滑り落ちる。実にイキで、優雅で、色気があった。得意ネタの一つ「高尾」では、三浦屋の遊女高尾が、死後、恋人の十三郎に会いに来るシーンで、高尾の足が消えたように見えた。

この人の得意ネタはほかに、「代書屋」「いかけや」などの爆笑ものもあるが、今回はこれからの季節も考え「野崎詣り」で落語から「類推」する楽しみを綴ってみたい。

先ず落語そのものが「類推」の世界。噺家が一人座布団に座り、右向いて左むいて、登場人物を演じ分け、話を進めていく。小道具は扇子と手ぬぐいだけ（時には小拍子も使うが）。言いたいことはこれではない。落語の奥深さ、当時の寄席の客の教養の高さを言いたい。

・・・ここにおります大坂の二人連れ。５月になったんで「野崎詣り」をしようと、徳庵堤から船で寝屋川をさかのぼっていきます。途中、船の中と堤防を歩く人とが「口喧嘩」をするというのが、「野崎詣り」の名物やったそうです。二人連れの一人はあまり気の回らない「喜六」、機転の利く「清八」に助けられながら、土手の人と喧嘩をします。頭を下げたら喧嘩に負けたことになります。

喜六は背が低いことから「小さい」といわれるのをことに嫌がります。

「船の中から喧嘩売ってる奴。しゃべんねんやたら立ってしゃべれ」「立ってるわい」「それで立ってんのか。カタカナのトの字のチョボやなー」、「清やん、あんなことぬかしとんねん。なんぞ言い返すええのんないか」。「ほなこないゆうたれ。小さい小さいと軽蔑するな。大は小を兼ねるといえど、タンス長持ちはマクラにはならん、江戸は浅草の観音さんは、お身丈は一寸八分でも十八間四面のお堂に入ってなさるわい。仁王さんは大きいても門番してるやないか。山椒は小粒でもヒリリと辛いわい」。

喜六は教えてもろたように一生懸命しゃべります。「江戸は深草の観音さん。お身丈は一寸八分でも十八間四面のお堂に入ってなさるわい」「それも言うなら深草やのうて浅草やろ。」、「深草と浅草では少々（少将）の違い。」

深草少将の物語を知らなければ、ここで笑いは生じない。時代設定は江戸末期だが、演じられた時の庶民は見識があったのだろうと「類推」すると頭が下がる。

・・・この落語、喜六が「小粒」（＝お金の一朱銀、二朱銀の意味もある）をいい忘れて「小粒が落ちてるぞ」といわれて、「ど～こ～に～」といいながら、川底を探すように頭を下げてオチになります。

でも、私の話にはオチはありません。なぜなら、船や土手から落ちると危険やさかいです。・・・

ドンドン～。（撥ね太鼓）

（理事　淺雛克巳）

☀次回のタイトルは、「む」から始まることばです。